

〈特集「ヴォイスとその周辺」〉

## ティディム・チン語におけるヴォイスとその周辺 Voice and Related Expressions in Tiddim Chin

大塚 行誠<sup>1\*</sup>, チンガイリャン<sup>2</sup>  
Kosei Otsuka, Cing Ngaih Lian

<sup>1</sup>大阪大学大学院人文学研究科  
Graduate School of Humanities, Osaka University

<sup>2</sup>東京外国語大学大学院総合国際学研究科  
Graduate School of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

**要旨:** 本稿の目的は、特集「ヴォイスとその周辺」(『語学研究所論集』第17号, 東京外国語大学)で提示された25の質問項目を基に、ヴォイスに関するティディム・チン語のデータを提供し、通言語的研究に寄与することである。

**Abstract:** This report aims to provide colloquial Tiddim Chin data based on 25 survey questions about voice, which were presented in the special issue of the *Journal of the Institute of Language Research* No. 17 (Tokyo University of Foreign Studies) titled “Voice and related expressions,” to contribute to cross-linguistic study.

**キーワード:** チン語支, 再帰, 相互, 中動態, 使役

**Keywords:** Kuki-Chin, reflexive, reciprocal, middle voice, causative

### 1. はじめに

本稿で扱う言語は、ミャンマー連邦共和国におけるティディム・チン語<sup>1</sup> (ISO 639-3: ctd) である。ティディム・チン語はシナ・チベット語族チベット・ビルマ語派のチン語支<sup>2</sup>に属する(西田 1989: 995)。ミャンマー連邦共和国北西部のチン州北部とザガイン管区域西部、およびインド共和国北東部のアッサム州、マニプル州南部、ミゾラム州北部を中心に約411,000人の話者がいる(Eberhard et al. 2019: 119, 258)。さらに、近年ではアメリカ合衆国やマレーシア等にもティディム・チン語を母語とする移民のコミュニティがある。

ティディム・チン語にはキリスト教宣教師が考案したラテン文字による正書法がある(藪 2001: 619)。この正書法はティディム・チン語話者の間で広く通用している。しかし、声調の表記が無く、母音の長短が弁別的であるにもかかわらずその長短を厳密に書き分けることもない。本稿ではティディム・チン語の音韻の実態になるべく即した形で言語データを提供する為、現行の正書法による表記に加え、本稿の末尾で簡単に紹介する音素表記でもティディム・チン語を書き表す。以下、正書法による表記を < > で囲んで示し、音素表記は斜体で示す。



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。  
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

\*大阪大学大学院人文学研究科外国学専攻・准教授

<sup>1</sup> 英語では“Tiddim Chin”(Henderson 1965), あるいはティディム・チン語の正書法に従って“Tedim Chin”(Zam Ngaih Cing 2017)と表記するのが一般的である。

<sup>2</sup> クキ・チン語支 (Kuki-Chin) とも呼ばれる。

ティディム・チン語には文語体 (narrative style) と口語体 (colloquial style) という2種類の異なる文体が存在する (Henderson 1965: 2)。物語の語りの部分やフォーマルな文章では文語体を用い、家庭内での日常会話等、カジュアルな場面では口語体を用いるのが一般的である。文語体と口語体は共通の音韻体系と語彙を持つが、人称やモダリティの標示方法等、文法に違いが見られる。本稿では口語体のティディム・チン語を主な考察対象とする。

本調査報告では、ティディム・チン語を母語とする共著者、チンガイリヤン (Cing Ngaih Lian) さんの内省による作例のほか、ティディム・チン語を母語とする調査協力者、パウシアンリアン (Pau Sian Lian) さんへの聞き取り調査で得た例文を挙げる。チンガイリヤンさんは1990年代にヤンゴンで生まれ、現在は東京の大学院に通う女性であり、ビルマ語と日本語の高度な運用能力を持つ。一方、パウシアンリアン (Pau Sian Lian) さんは1980年代にチン州北部のティディム (Tedim) で生まれ、ティディム・チン語話者の多い地域で言語形成期を過ごした男性である。ティディム・チン語のほか、ビルマ語も流暢に話すことができる。以下、チンガイリヤンさんからのコメントはCNL、パウシアンリアンさんからのコメントはPSLと明記して述べる。

## 2. 調査結果

本節では特集「ヴォイスとその周辺」(『語学研究所論集』第17号, 東京外国語大学) に掲載されたヴォイスに関する25の質問項目への回答を示す。以下、具体的なティディム・チン語のデータを提示する前に、分析と考察の際に必要な前提知識として、[1] ティディム・チン語の文法概要 (語順と人称標示) と [2] ヴォイスに関連する文法事項 (動詞語幹の交替) について述べておく。

### [1] ティディム・チン語の文法概要：語順と人称標示

ティディム・チン語の基本語順は自動詞節の場合SV、他動詞節の場合SOVであり、述部が文末に来るという制約が強い。能格型の格配列を示し、基本的に名詞句に格助詞を後置することで様々な格が標示できるほか、声調交替で格を標示する場合もある (Henderson 1965: 69-71)。

述部において動詞の後に助動詞や助詞といった付属語を置くことで様々なテンス、アスペクト、モダリティを表すことができる。付属語のうち、助動詞は助詞と異なり、1つの語根が2つの語幹形式を持つという点で動詞と同じ形態的特徴を持つ (次の [2] を参照のこと)。

口語体における人称標示には、自立語の人称代名詞、前置型の人称接語、後置型の人称接語、方向接辞の来辞 <hong> *hoŋ*<sup>l</sup>- または <ong> *oŋ*<sup>l</sup>- を用いる。このうち、前置型の人称接語は名詞句の前に置くと所有者の人称を表し、述語動詞の前に置くと主語の人称を表す。一方、後置型の人称接語は述語動詞の後に置いて主語の人称およびモダリティを表す (Henderson 1965: 108-111)。一人称または二人称の目的語を取る場合、すなわち、発話行為参与者 (speech-act participant) が被動者や受領者、被使役者である場合、来辞 <hong> *hoŋ*<sup>l</sup>- または <ong> *oŋ*<sup>l</sup>- を動詞の前に義務的に付加する。来辞 <hong> *hoŋ*<sup>l</sup>- はフォーマルな場面で用いられる傾向が強い一方、来辞 <ong> *oŋ*<sup>l</sup>- はよりカジュアルな場面で用いられる (Otsuka 2022: 201-205)。

### [2] ヴォイスに関連する文法事項：動詞語幹の交替

チン語支に属する多くの言語で1つの動詞語根が2つの語幹形式を持つという形態的な特徴が見られる (西田 1989: 999-1003, VanBik 2009: 10-16)。ティディム・チン語の動詞も「形式 I (Form I)」と「形式 II (Form II)」という2つの語幹形式を持つものが多い (Henderson 1965: 72-89)。

主節の述語動詞は通常形式 I で現れることから、形式 I のほうが無標の形式だと言える。一方、有標の形式 II は名詞的な従属節の中で現れるほか、動詞によっては名詞化や他動詞化などの機能も担っている

る。すなわち、動詞語幹の交替は様々な形態統語的条件によって生じる。本稿のテーマであるヴォイスもこの動詞語幹の交替と関係している。例えば、一部の動詞では動詞語幹の形式Ⅱ自体に他動詞化の機能があり、語幹の形式で動詞の自他対応を示すことがある。表 1 に示した通り、形式Ⅰのほうが自動詞 (intransitive verb) で、形式Ⅱが単一他動詞 (monotransitive verb) という対応のほか、形式Ⅰのほうが単一他動詞で、形式Ⅱが二重他動詞 (ditransitive verb) という対応も見られる。さらに、代行態を表す他動詞化接尾辞 <sak> -sak<sup>3</sup> (例 (18), (21), (23) 参照) や随伴を表す他動詞化接尾辞 <pih> -pi<sup>2</sup> (例 (20), (22) 参照) をはじめ、いくつかの他動詞化接辞は形式Ⅱの動詞と必ず共起することから、形式Ⅱは項増加にも関わると言える。

表 1 動詞語幹の形式Ⅰと形式Ⅱの対立に見られる自他動詞対

自動詞 (形式Ⅰ)		単一他動詞 (形式Ⅱ)		参照先
<dim> <i>dim</i> <sup>1</sup>	「満ちる」	<dim> <i>dim</i> <sup>3</sup>	「満たす」	(Henderson 1965: 83)
単一他動詞 (形式Ⅰ)		二重他動詞 (形式Ⅱ)		参照先
<lam> <i>lam</i> <sup>1</sup>	「稼ぐ」	<lam> <i>lam</i> <sup>3</sup>	「稼いでやる」	(Henderson 1965: 83)

本稿のグロスでは動詞語幹の形式を逐一明記し、動詞語幹が形式Ⅰの場合には「<sup>1</sup>」という記号を、形式Ⅱの場合には「<sup>3</sup>」という記号を付け加える。但し、語幹の形式的区別が無い動詞、すなわち不変化形式 (invariant form) である場合には「(inv.)」と記す。

以下、調査の結果を示す。各見出しにおいて [ ] で囲んで示した日本語の例文の ID は語学研究所提供の調査票に基づくものであり、すべて 4- から ID が始まっている。

[4-1a] 【自動詞と他動詞の対立・自動詞による表現】

(風などで) ドアが開いた。

動作主を表示しない表現では中動態標識 <ki> ki<sup>3</sup>- が用いられる。中動態標識 <ki> ki<sup>3</sup>- は項減少や逆使役化に関わる。例えば、例 (1) の他動詞 <hong> hong<sup>2</sup> 「開ける」に中動態標識 <ki> ki<sup>3</sup>- を付加すると、自動詞 <kihong> ki<sup>3</sup>-hong<sup>2</sup> 「開く」になる。

- (1) <Kong kihong.>  
kong<sup>2</sup> ki<sup>3</sup>-hong<sup>2</sup>  
door MID-open<sup>1</sup>  
「ドアが開きました。」

[4-1b] 【自動詞と他動詞の対立・他動詞による表現】

(彼が) ドアを開けた。

例 (2) は他動詞 <hong> hong<sup>2</sup> 「開ける」を用いた他動詞節である。例 (2) のような他動詞節における主語の人称代名詞は絶対格形 <amah> a'ma<sup>2</sup> 「彼」ではなく、能格形 <amah'n> a'man<sup>3</sup> 「彼」を用いる。

- (2) <(Amah'n) kong hong.>  
 (a<sup>1</sup>man<sup>3</sup>) koj<sup>2</sup> hoy<sup>2</sup>  
 3SG.ERG door open<sup>1</sup>  
 「(彼が) ドアを開けました。」

[4-1c] 【自動詞と他動詞の対立・他動詞の受け身】  
 (入り口の) ドアが開けられた。

動作主を表示しない受身文では、例 (1) の自動詞節の場合と同様に、中動態標識 <ki> ki<sup>3</sup>- を他動詞に付加して表す (例 (3) 参照)。文中の助詞 <ta> ta.<sup>3</sup> は何らかの新しい事象が生起したことを表す。

- (3) <Kong kihong ta.>  
 koj<sup>2</sup> ki<sup>3</sup>-hoy<sup>2</sup> ta.<sup>3</sup>  
 door MID-open<sup>1</sup> NSIT  
 「ドアが開けられました。」

[4-1d] 【自動詞と他動詞の対立】  
 ドアが壊れた。

例 (4) の自動詞 <kisia> ki<sup>3</sup>-sia<sup>1</sup> 「壊れる」は、中動態標識 <ki> ki<sup>3</sup>- と動詞 <sia> sia<sup>1</sup> 「悪い」から成る。一方、これに対する他動詞は、動詞 <su> su.<sup>3</sup> 「磨く、打つ」と動詞 <sia> sia<sup>1</sup> 「悪い」から成る複合動詞 <susia> su<sup>3</sup>-sia<sup>1</sup> 「壊す」である (例 (5) 参照)。

- (4) <Kong kisia.>  
 koj<sup>2</sup> ki<sup>3</sup>-sia<sup>1</sup>  
 door MID-bad<sup>1</sup>  
 「ドアが壊れました。」

- (5) <Kong susia.>  
 koj<sup>2</sup> su<sup>3</sup>-sia<sup>1</sup>  
 door polish<sup>1</sup>-bad<sup>1</sup>  
 「ドアを壊しました。」

[4-2] 【自動詞からの使役】  
 私は (自分の) 弟を立たせた。

以下の例 (6) は自動詞からの使役の例であり、例 (7) は他動詞からの使役の例である。使役は原則として形式 I の自動詞に使役接尾辞 <sak> -sak<sup>3</sup> を付けて表す。使役者項は能格で標示し、被使役者項、つまり例 (6) の <ka naupa> ka<sup>2</sup> na:u<sup>2</sup>pa.<sup>1</sup> 「私の弟」は絶対格 (ゼロ格) で標示する。

(6) <Ke'n ka naupa dingsak.>

ken<sup>3</sup> ka<sup>2</sup> na:u<sup>2</sup>pa:<sup>1</sup> diŋ<sup>2</sup>-sak<sup>3</sup>  
1SG.ERG 1 younger.brother stand<sup>1</sup>-CAUS  
「私は私の弟を立たせました。」

[4-3] 【他動詞からの使役】

私は（自分の）弟に歌を歌わせた。

他動詞からの使役も例 (6) の自動詞からの使役の場合と同様, 原則として形式 I の他動詞に使役接尾辞 <sak> -sak<sup>3</sup> を付加して表す (例 (7) 参照)。一般的には被使役者項 (<ka naupa> ka<sup>2</sup> na:u<sup>2</sup>pa:<sup>1</sup> 「私の弟」), 被動者項 (<la> la:<sup>1</sup> 「歌」) の順序で現れ, どちらも絶対格 (ゼロ格) で標示する。

(7) <Ke'n ka naupa la sasak.>

ken<sup>3</sup> ka<sup>2</sup> na:u<sup>2</sup>pa:<sup>1</sup> la:<sup>1</sup> sa<sup>3</sup>-sak<sup>3</sup>  
1SG.ERG 1 younger.brother song sing<sup>1</sup>-CAUS  
「私は私の弟に歌を歌わせました。」

[4-4a] 【強制使役】

(遊びたがっている子供に無理やり) 母は子供にパンを買いに行かせた。

以下の例 (8) と (9) にティディム・チン語における強制使役の例を示す。質問項目にある日本語の例文をそのままティディム・チン語に訳すと, 形式 I の動詞に使役接尾辞 <sak> -sak<sup>3</sup> を付加した使役文になる (例 (8) 参照)。例 (8) の他動詞 <lei> lei:<sup>1</sup> 「買う」に付いている接頭辞 <va> va<sup>3</sup>- は去辞 (andative) であり, 直示的中心 (deictic center) から離れていく方向を表す。さらに, 例 (9) のように他動詞 <sawl> so:l<sup>2</sup> 「遣わせる, 命じる, させる」を用い, 「買うようにさせる」と言う事もあると PSL は述べている。この文は, 例 (8) の典型的な使役文のように他動詞 <lei> lei:<sup>1</sup> 「買う」の動作主 <a ta> a<sup>3</sup> ta:<sup>1</sup> 「彼女の子供」が能格標示を受けておらず, 迂言的な使役と言える。

(8) <A nu in a ta pongmoh va leisak.>

a<sup>3</sup> nu:<sup>1</sup> in<sup>3</sup> a<sup>3</sup> ta:<sup>1</sup> poŋ<sup>2</sup>mou<sup>2</sup>3 va<sup>3</sup>-lei<sup>1</sup>-sak<sup>3</sup>  
3 mother ERG 3 child BUR:bread DEIC-buy<sup>1</sup>-CAUS  
「彼女の母は彼女の子供にパンを買いに行かせました。」

(9) <A nu in a ta pongmoh lei dinga sawl.>

a<sup>3</sup> nu:<sup>1</sup> in<sup>3</sup> a<sup>3</sup> ta:<sup>1</sup> poŋ<sup>2</sup>mou<sup>2</sup>3 lei<sup>1</sup> di:ŋ<sup>1</sup> a:<sup>2</sup> so:l<sup>2</sup>  
3 mother ERG 3 child BUR:bread buy<sup>1</sup> PURP CNJ enjoin<sup>1</sup>  
「彼女の母は彼女の子供にパンをかうようにさせました。」

[4-4b] 【許可使役】

(遊びに行きたがっているのを見て) 母は子供に遊びに行かせた。

以下の例 (10) から例 (12) に許可使役の例を示す。例 (10) の場合, 上記の例 (8) の強制使役との間

に文法構造上の違いは見られない。すなわち、質問項目にある許可使役の例文をそのままティディム・チン語に訳すと、形式 I の動詞に使役接尾辞 <sak> *-sak<sup>3</sup>* を付加した使役文になる。なお、例 (10) の <kimawl> *ki<sup>3</sup>-mo:l<sup>2</sup>* 「遊ぶ」は中動態標識 <ki> *ki<sup>3</sup>-* を含む自動詞である。

- (10) <A nu in a ta kimawlsak.>  
*a<sup>3</sup> nu:l<sup>1</sup> in<sup>3</sup> a<sup>3</sup> ta:l<sup>1</sup> ki<sup>3</sup>-mo:l<sup>2</sup>-sak<sup>3</sup>*  
 3 mother ERG 3 child MID-play<sup>I</sup>-CAUS  
 「彼女の母は彼女の子供を遊ばせました。」

CNL によれば、許可であることをあえて強調する場合には、例 (11) のように他動詞 <phal> *p<sup>h</sup>al<sup>2</sup>* 「許す」とその目的語にあたる名詞節（例文中の { } で括った部分）を用いて表すか、例 (12) のようにビルマ語からの借用語である名詞 <khuin> *xuin<sup>3</sup>* 「許可」<sup>3</sup>とその修飾節を用いて表現する。

- (11) <A nu in a ta a kimawl ding phal.>  
*a<sup>3</sup> nu:l<sup>1</sup> in<sup>3</sup> { a<sup>3</sup> ta:l<sup>1</sup> a<sup>1</sup> ki<sup>3</sup>-mo:l<sup>3</sup> di:ŋ<sup>1</sup> } p<sup>h</sup>al<sup>2</sup>*  
 3 mother ERG 3 child 3 MID-play<sup>II</sup> PURP allow<sup>I</sup>  
 「彼女の母は彼女の子供が遊ぶのを許しました。」

- (12) <A nu in a ta kimawl khuin pia.>  
*a<sup>3</sup> nu:l<sup>1</sup> in<sup>3</sup> a<sup>3</sup> ta:l<sup>1</sup> ki<sup>3</sup>-mo:l<sup>3</sup> xuin<sup>3</sup> pia<sup>1</sup>*  
 3 mother ERG 3 child MID-play<sup>II</sup> BUR:permission give<sup>I</sup>  
 「彼女の母は彼女の子供が遊ぶ許可を与えました。」

#### [4-5a/b] 【他動詞による表現と自動詞の使役】

私は弟にその服を着させた。

現代日本語における「着せた」と「着させた」の違いはティディム・チン語では特に見られないようである。他動詞 <silh> *sil<sup>23</sup>* 「着る」に使役接尾辞 <sak> *-sak<sup>3</sup>* を付加して表す。例 (13) の他動詞 <silh> *sil<sup>23</sup>* 「着る」は形式 I と形式 II の区別を持たない不変化形式だが、形式上の区別がある場合、使役接尾辞は原則的に動詞語幹の形式 I のほうに接続する。さらに、他動詞 <sawl> *so:l<sup>2</sup>* 「遣わせる、命じる、させる」を用いて例 (14) のように「着るようにさせる」と表すことも可能であると PSL は指摘している。この文も前述の例 (9) の場合と同じく、他動詞 <silh> *sil<sup>23</sup>* 「着る」の動作主 <ka naupa> *ka<sup>2</sup> na:u<sup>2</sup>pa:l<sup>1</sup>* 「私の弟」が能格標示を受けておらず、迂言的な使役と言えるだろう。

- (13) <Ke'n ka naupa tua puan silhsak.>  
*ken<sup>3</sup> ka<sup>2</sup> na:u<sup>2</sup>pa:l<sup>1</sup> tua<sup>2</sup> puan<sup>1</sup> sil<sup>23</sup>-sak<sup>3</sup>*  
 1SG.ERG 1 younger.brother DEM clothing wear(inv.)-CAUS  
 「私は私の弟にその服を着せました。」

<sup>3</sup> ビルマ語の名詞  $\text{ခွင့်}$  <ALA-LC 式ローマ字転写: khvañ<sup>3</sup> 「許可」からの借用語。

(14) <Ke'n ka naupa tua puan silh dinga sawl.>

*ken<sup>3</sup> ka<sup>2</sup> na:u<sup>2</sup>pa:<sup>1</sup> tua<sup>2</sup> puan<sup>1</sup> sil<sup>23</sup> di:ŋ<sup>1</sup> a:<sup>2</sup> so:l<sup>2</sup>*  
1SG.ERG 1 younger.brother DEM clothing wear(inv.) PURP CNJ enjoin<sup>1</sup>  
「私は私の弟にその服を着るようにさせました。」

[4-6] 【やりもらい, (話者から見ての) 授恩恵と受恩恵の違い】

私は弟にその本をあげた。

やりもらいの表現には他動詞 <pia> *pia<sup>1</sup>* 「与える」を用いる。受領者項は通常例 (15) のように被動者項より前に置いて絶対格で標示する。例 (16) のように名詞 <kiang> *kiang<sup>2</sup>* 「~のもと」(斜格形 <kiang> *kiang<sup>3</sup>*) を後置する形で表す場合もあると CNL は述べている。

(15) <Ke'n ka naupa tua laibu pia.>

*ken<sup>3</sup> ka<sup>2</sup> na:u<sup>2</sup>pa:<sup>1</sup> tua<sup>2</sup> la:i<sup>3</sup>bu:<sup>1</sup> pia<sup>1</sup>*  
1SG.ERG 1 younger.brother DEM book give<sup>1</sup>  
「私は私の弟にその本をあげました。」

(16) <Ke'n ka naupa' kiang tua laibu pia.>

*ken<sup>3</sup> ka<sup>2</sup> na:u<sup>2</sup>pa:<sup>3</sup> kiang<sup>3</sup> tua<sup>2</sup> la:i<sup>3</sup>bu:<sup>1</sup> pia<sup>1</sup>*  
1SG.ERG 1 younger.brother.OBL nearby.OBL DEM book give<sup>1</sup>  
「私は私の弟のもとにその本をあげました。」

以下の例 (17) に示す通り, 受領者が話し手(一人称)または聞き手(二人称)である場合, 来辞 <hong> *hoŋ<sup>1</sup>*- または <ong> *oŋ<sup>1</sup>*- を動詞の前に義務的に付加する。

(17) <Ka naupa in kei tua laibu hong pia.>

*ka<sup>2</sup> na:u<sup>2</sup>pa:<sup>1</sup> in<sup>3</sup> kei<sup>1</sup> tua<sup>2</sup> la:i<sup>3</sup>bu:<sup>1</sup> hoŋ<sup>1</sup>-pia<sup>1</sup>*  
1 younger.brother ERG 1SG DEM book DEIC-give<sup>1</sup>  
「私の弟は私にその本をくれました。」

[4-7a] 【やりもらい, (話者から見ての) 授恩恵と受恩恵の違い】

私は弟に本を読んであげた。

例 (18) では, 形式Ⅱの動詞に代行態 (substitutive<sup>4</sup>) を表す他動詞化接尾辞 <sak> *-sak<sup>3</sup>* を付加することで「~してあげる」という授恩恵の意味を表している。代行態とは主語の指示対象が目的語の指示対象の代わりに動作を行うことを表すものであり, しばしば授恩恵または加害の意味を伴う。形式Ⅱの動詞に他動詞化接尾辞 <sak> *-sak<sup>3</sup>* を付加することで動詞の取る項は1項増え, その増えた項は動作の被代行者, 受益者, または被害者を表す。代行態を表す他動詞化接尾辞 <sak> *-sak<sup>3</sup>* は上述の使役接尾辞 <sak> *-sak<sup>3</sup>* と同形である為, 接尾辞 <sak> *-sak<sup>3</sup>* が代行態と使役のどちらを表すのかについては, その

<sup>4</sup> チン語支のライ語における “substitutive” (Peterson 1998: 96-97) に相当するもので, 筆者は「代行態」と訳した。

接尾辞 <sak> -sak<sup>3</sup> が接続している動词语幹の形式によって判断しなければならない。すなわち、形式Ⅰの動詞に接尾辞 <sak> -sak<sup>3</sup> が付くのであればそれは基本的には使役接尾辞であり、形式Ⅱの動詞に接尾辞 <sak> -sak<sup>3</sup> が付くのであればそれは基本的には代行態を表す他動詞化接尾辞である。

チン語支の諸言語の中にはダーイ・チン語の -pe:t/pe (So-Hartmann 2009: 198) 等、本来「与える」という意味を持つ動詞が文法化し、授恩恵の他動詞化接辞として機能しているケースも見られるが、ティディム・チン語ではそのような文法化が見られない。

(18) <Ke'n ka naupa laibu simsak.>

ken<sup>3</sup> ka<sup>2</sup> na:u<sup>2</sup>pa:<sup>1</sup> la:i<sup>3</sup>bu:<sup>1</sup> sim<sup>3</sup>-sak<sup>3</sup>  
 1SG.ERG 1 younger.brother book read<sup>II</sup>-SUBS

「私は私の弟（の代わり）に本を読んであげました。」

PSL は、他動詞 <sim> sim<sup>2</sup> 「読む」（無標の形式Ⅰ）の形式Ⅱ <sim> sim<sup>3</sup> 「読む」が「読んでやる」という意味を表すこともあると指摘している（例 (19) 参照）。

(19) <Ke'n ka naupa laibu sim.>

ken<sup>3</sup> ka<sup>2</sup> na:u<sup>2</sup>pa:<sup>1</sup> la:i<sup>3</sup>bu:<sup>1</sup> sim<sup>3</sup>  
 1SG.ERG 1 younger.brother book read<sup>II</sup>

「私は私の弟に本を読んであげました。」

日本語の例文を次の例 (20) のように訳すことも可能だと CNL は述べている。形式Ⅱの動詞 <sim> sim<sup>3</sup> 「読む」に付加している他動詞化接尾辞 <pih> -pi<sup>2</sup> は他者を随伴することを表す。形式Ⅱの動詞に随伴を表す他動詞化接尾辞 <pih> -pi<sup>2</sup> を付加することで動詞の取る項が1項増える。その項は随伴者または付帯する物を表す。

(20) <Ke'n ka naupa laibu simpih.>

ken<sup>3</sup> ka<sup>2</sup> na:u<sup>2</sup>pa:<sup>1</sup> la:i<sup>3</sup>bu:<sup>1</sup> sim<sup>3</sup>-pi<sup>2</sup>  
 1SG.ERG 1 younger.brother book read<sup>II</sup>-COM

「私は私の弟と共に本を読みました。」

#### [4-7b] 【やりもらい、（話者から見ての）授恩恵と受恩恵の違い】

兄は私に本を読んでくれた。

先に述べた通り、代行態は授恩恵の意味を持つこともある。例 (21) では、形式Ⅱの動詞 <sim> sim<sup>3</sup> 「読む」に代行態を表す他動詞化接尾辞 <sak> -sak<sup>3</sup> を付加することで「～してくれる、～してあげる」という授恩恵の意味を表している。代行態の他動詞化接尾辞 <sak> -sak<sup>3</sup> の付加で増えた被代行者、受益者、または被害者の項が話し手または聞き手等の発話行為参加者を指す場合、動詞の前に必ず来辞 <hong> hong<sup>1</sup>- または <ong> ong<sup>1</sup>- を付加する（例 (21) 参照）。

(21) <Ka u in laibu hong simsak.>

*ka*<sup>2</sup> *u*<sup>2</sup> *in*<sup>3</sup> *la:i<sup>3</sup>bu*<sup>1</sup> *hoŋ<sup>1</sup>-sim<sup>3</sup>-sak<sup>3</sup>*  
1 elder.sibling ERG book DEIC-read<sup>II</sup>-SUBS  
「私の兄は私に本を読んでもくれました。」

先の例 (20) と同様, 日本語の例文を訳す場合, 随伴を表す他動詞化接尾辞 <pih> *-pi<sup>2</sup>* を用いて意識することも可能だと CNL は指摘している。形式 II の動詞 <sim> *sim<sup>3</sup>* 「読む」に他動詞化接尾辞 <pih> *-pi<sup>2</sup>* を付加すると他者を随伴することを表す (例 (22) 参照)。

(22) <Ka u in laibu hong simpih.>

*ka*<sup>2</sup> *u*<sup>2</sup> *in*<sup>3</sup> *la:i<sup>3</sup>bu*<sup>1</sup> *hoŋ<sup>1</sup>-sim<sup>3</sup>-pi<sup>2</sup>*  
1 elder.sibling ERG book DEIC-read<sup>II</sup>-COM  
「私の兄は私と共に本を読みました。」

[4-7c] 【テモラウ】

私は母に髪を切ってもらった。

上記の文もティディム・チン語では代行態を表す他動詞化接尾辞 <sak> *-sak<sup>3</sup>* を用いて表す。例 (23) のように, 他動詞 <met> *me:t<sup>1</sup>* 「切る」 (無標の形式 I) の形式 II <met> *me:t<sup>3</sup>* 「切る」に代行態を表す他動詞化接尾辞 <sak> *-sak<sup>3</sup>* を付加すると「(私の代わりに) 切ってくれる」という授恩恵の意味を表す。

(23) <Ka nu in sam hong metsak.>

*ka*<sup>3</sup> *nu*<sup>1</sup> *in*<sup>3</sup> *sam*<sup>1</sup> *hoŋ<sup>1</sup>-me:t<sup>3</sup>-sak<sup>3</sup>*  
1 mother ERG hair DEIC-cut<sup>II</sup>-SUBS  
「私の母は髪を切ってくれました。」

[4-8a] 【再帰】

私は (自分の) 体を洗った。

汚れた身体を洗浄することが目的の場合は例 (24) のような他動詞節を用いて表す。

(24) <Ke'n ka pumpi sil.>

*ken*<sup>3</sup> *ka*<sup>1</sup> *pum<sup>3</sup>pi*<sup>1</sup> *sil*<sup>1</sup>  
1SG.ERG 1 body wash<sup>1</sup>  
「私は私の体を洗いました。」

一方, 以下の例 (25) に示した通り, 「入浴する」という習慣的な行為は他動詞 <sil> *sil<sup>1</sup>* 「洗う」に再帰用法の中動態標識 <ki> *ki<sup>3</sup>* を付加した形で表す。名詞 <pum> *pum<sup>3</sup>* 「体」と他動詞 <sil> *sil<sup>1</sup>* 「洗う」から成る複合動詞に中動態標識 <ki> *ki<sup>3</sup>* を付加した例もある (例 (26) 参照)。

(25) <Kei ksil.>  
*kei<sup>l</sup> ki<sup>3</sup>-sil<sup>l</sup>*  
1SG MID-wash<sup>l</sup>  
「私は入浴する。」

(26) <Kipumsil ing.>  
*ki<sup>3</sup>-pum<sup>3</sup>-sil<sup>l</sup> ij<sup>3</sup>*  
MID-body-wash<sup>l</sup> 1SG.REAL  
「私は入浴して体を洗う。」

[4-8b] 【再帰】  
私は手を洗った。

上述の <kisil> *ki<sup>3</sup>-sil<sup>l</sup>*「入浴する」(例 (25) 参照) や <kipumsil> *ki<sup>3</sup>-pum<sup>3</sup>-sil<sup>l</sup>*「入浴して体を洗う」(例 (26) 参照) 等の一般的な入浴行為ではなく、例 (24) のように、汚れた身体部位を洗浄することが目的である場合には中動態標識 <ki> *ki<sup>3</sup>-* を用いずに、他動詞 <sil> *sil<sup>l</sup>*「洗う」単独で表す(例 (27), 例 (28) 参照)。

(27) <Ke'n ka khut sil.>  
*ken<sup>3</sup> ka<sup>l</sup> xut<sup>3</sup> sil<sup>l</sup>*  
1SG.ERG 1 hand wash<sup>l</sup>  
「私は私の手を洗いました。」

[4-8c] 【再帰】  
彼は手を洗った。

(28) <Amah'n a khut sil.>  
*a'man<sup>3</sup> a<sup>l</sup> xut<sup>3</sup> sil<sup>l</sup>*  
3SG.ERG 3 hand wash<sup>l</sup>  
「彼は彼の手を洗いました。」

[4-9] 【自利態】  
(自分のために) 私はその本を買った。

動作主が動詞によって表された行為の受益者または受領者と同一指示的であるような再帰を Kemmer (1993) は「間接的な再帰 (indirect reflexive)」と呼んだ (Kemmer 1993: 74)。しかし、ティディム・チン語の中動態標識 <ki> *ki<sup>3</sup>-* にはそのような間接的な再帰を表すはたらきが無いようである (例 (29) 参照)。

(29) <Kei' adinga ke'n tua laibu lei.>

*kei<sup>3</sup> a:'di:ŋ<sup>1</sup> a:<sup>2</sup> ken<sup>3</sup> tua<sup>2</sup> la:i<sup>3</sup>bu:<sup>1</sup> lei<sup>1</sup>*  
1SG.OBL for CNJ 1SG.ERG DEM book buy<sup>1</sup>  
「私は自分のためにその本を買いました。」

[4-10] 【相互】

彼らは（／その人たちは）（互いに）殴り合っていた。

中動態標識 <ki> *ki<sup>3</sup>-* には相互の動作（例 (30) 参照）や相互の関係（例 (31) 参照）を表す用法がある。

(30) <(Amau) amau le amau kilai uh.>

*(a'ma:u:<sup>3</sup>) a'ma:u:<sup>3</sup> le<sup>2</sup> a'ma:u:<sup>3</sup> ki<sup>3</sup>-la:i<sup>1</sup> u<sup>2</sup>*  
3PL 3PL CNJ 3PL MID-fight<sup>1</sup> PL  
「（彼らは）互いに争い合いました。」

(31) <Ka inn le ka sang kinai.>

*ka<sup>3</sup> in<sup>1</sup> le<sup>2</sup> ka<sup>3</sup> sa:ŋ<sup>1</sup> ki<sup>3</sup>-na:i<sup>1</sup>*  
1 house CNJ 1 school MID-near<sup>1</sup>  
「私の家と私の学校は互いに近いです。」

[4-11] 【衆動】

その人たちは（みんな一緒に）街へ行った。

調査項目の例文のように「その人たち」という動作主が文中で明示されている場合は中動態標識 <ki> *ki<sup>3</sup>-* を用いることができない（例 (32) 参照）。しかし、動作主を表示しない文であれば中動態標識 <ki> *ki<sup>3</sup>-* が用いられる（例 (33) 参照）。

(32) <Tua mite khuasung ah pai khawm uh.>

*tua<sup>2</sup> mi:<sup>1</sup> te:<sup>1</sup> xo<sup>1</sup>-suŋ<sup>2</sup> a<sup>2</sup> pai<sup>2</sup> xo:m<sup>3</sup> u<sup>2</sup>*  
DEM human.being PL town-inside LOC go<sup>1</sup> gather<sup>1</sup> PL  
「その人たちは街中へ一緒に行きました。」

(33) <COVID natna hanga, inn ah kiom zaw.>

*COVID nat<sup>3</sup>na:<sup>2</sup> ha:ŋ<sup>1</sup> a:<sup>2</sup> in<sup>1</sup> a<sup>2</sup> ki<sup>3</sup>-om<sup>1</sup> zo:<sup>1</sup>*  
COVID disease reason CNJ house LOC MID-exist<sup>1</sup> more<sup>1</sup>  
「新型コロナにより（人々は）家にいることが多かった。」

[4-12] 【自発】

その映画は泣ける（その映画を見ると泣いてしまう）。

例 (34) は、無生物主語の名詞句 <tua zohsin> *tua<sup>2</sup> zou<sup>2</sup>si:n<sup>3</sup>* 「その映画」が使役者となっており、使役

接尾辞 <sak> *-sak<sup>3</sup>* を用いた使役文となっている。直訳すれば、「その映画は私を泣かせる」という意味である。

なお、PSLは「映画」にあたる語の訳として <zohsin> *zou<sup>2</sup>si:n<sup>3</sup>* 「映画」のほか、ビルマ語マンダレー方言からの借用語 <datsin> *dat<sup>3</sup>si:n<sup>3</sup>* や英語からの借用語 <movie> *mu:<sup>2</sup>vi:<sup>2</sup>* も挙げていた。

- (34) <Tua zohsin in hong kapsak.>  
*tua<sup>2</sup> zou<sup>2</sup>si:n<sup>3</sup> in<sup>3</sup> hong<sup>1</sup>-kap<sup>3</sup>-sak<sup>3</sup>*  
DEM BUR:movie ERG DEIC-cry<sup>1</sup>-CAUS  
「その映画は私を泣かせました。」

[4-13a] 【意志／無意志】  
私は卵を割った。

例 (35) では、意志をもって卵を割る行為を他動詞 <sukham> *su<sup>3</sup>xam<sup>2</sup>* 「割る」と表している。この他動詞 <sukham> *su<sup>3</sup>xam<sup>2</sup>* 「割る」は、[4-1d] の例 (5) で示した複合動詞 <susia> *su<sup>3</sup>sia<sup>1</sup>* 「壊す」と同様に、動詞 <su> *su:<sup>3</sup>* 「磨く、打つ」と何らかの形態素 <kham> *xam<sup>2</sup>* から成る複合動詞だとも考えられるが、現代ティディム・チン語ではこれ以上の分析が不可能な形態素となっている。

- (35) <Ke'n aktui sukham.>  
*ken<sup>3</sup> a:k<sup>2</sup>-tu:i<sup>2</sup> su<sup>3</sup>xam<sup>2</sup>*  
1SG.ERG hen-egg break<sup>1</sup>  
「私は鶏卵を割りました。」

[4-13b] 【意志／無意志】  
（うっかり落として）私はコップを割った／割ってしまった。

例 (36) に示した通り、無意志の動作を表すには助動詞 <kha> *xa:<sup>1</sup>* 「うっかり～する」を用いることが多い。述語動詞は中動態標識 <ki> *ki<sup>3</sup>-*を伴う自動詞 <kitam> *ki<sup>3</sup>-tam<sup>3</sup>* 「割れる」に使役接尾辞 <sak> *-sak<sup>3</sup>* を付加することで「割れるようにする」という意味を表している。

- (36) <Ke'n hai kitamsak kha.>  
*ken<sup>3</sup> ha:i<sup>3</sup> ki<sup>3</sup>-tam<sup>3</sup>-sak<sup>3</sup> xa:<sup>1</sup>*  
1SG.ERG cup MID-break<sup>1</sup>-CAUS by.mistake<sup>1</sup>  
「私はうっかりコップを割れるようにしてしまいました。」

[4-14a] 【随意の不可能と不随意の不可能】  
きのう私はコーヒーを飲みすぎて（飲みすぎたので）眠れなかった。

以下の例 (37) と例 (38) に示した通り、随意の不可能と不随意の不可能はどちらも可能の助動詞 <thei> *t<sup>h</sup>ei<sup>3</sup>* 「～することができる」を用いて表すことができる。

(37) <Zana kei niangtui tam dawn in, ihmu thei lo.>

za:n<sup>2</sup> a:<sup>2</sup> kei<sup>1</sup> niang<sup>2</sup>tu:i<sup>1</sup> tam<sup>1</sup> do:n<sup>2</sup> in<sup>3</sup> i<sup>2</sup>mu<sup>1</sup> t<sup>h</sup>ei<sup>3</sup> lou<sup>3</sup>  
yesterday CNJ 1SG tea much<sup>1</sup> drink<sup>1</sup> CNJ sleep<sup>1</sup> can<sup>1</sup> NEG<sup>1</sup>

「昨日私はお茶を飲みすぎて眠れませんでした。」

[4-14b] 【随意の不可能と不随意の不可能】

きのう私は仕事がたくさんあって（たくさんあったので）眠れなかった。

(38) <Zana kei nasep tam lua in, ihmu thei lo.>

za:n<sup>2</sup> a:<sup>2</sup> kei<sup>1</sup> na<sup>3</sup>sep<sup>3</sup> tam<sup>1</sup> lua<sup>2</sup> in<sup>3</sup> i<sup>2</sup>mu<sup>1</sup> t<sup>h</sup>ei<sup>3</sup> lou<sup>3</sup>  
yesterday CNJ 1SG work<sup>11</sup> many<sup>1</sup> too.much<sup>1</sup> CNJ sleep<sup>1</sup> can<sup>1</sup> NEG<sup>1</sup>

「昨日私は仕事がたくさんあって寝られませんでした。」

さらに, CNL は, 日本語の例文をより自然な形で訳すとすれば, 助詞 <man> man<sup>1</sup> 「～する暇がある」を用いて例 (39) のように翻訳することもできると述べた。

(39) <Zana kei nasep tam lua in, ihmu man lo.>

za:n<sup>2</sup> a:<sup>2</sup> kei<sup>1</sup> na<sup>3</sup>sep<sup>3</sup> tam<sup>1</sup> lua<sup>2</sup> in<sup>3</sup> i<sup>2</sup>mu<sup>1</sup> man<sup>1</sup> lou<sup>3</sup>  
yesterday CNJ 1SG work<sup>11</sup> many<sup>1</sup> too.much<sup>1</sup> CNJ sleep<sup>1</sup> at.leisure NEG<sup>1</sup>

「昨日私は仕事がたくさんあって寝る暇もありませんでした。」

[4-15] 【全体と部分・主体・一時的】

私は頭が痛い。

例 (40) の単文のほか, 他動詞 <sa> sa:<sup>3</sup> 「思う, 感じる」を用いた複文 (例 (41) 参照) で表すことも可能である。

(40) <Ka lutang na.>

ka<sup>3</sup> lu<sup>1</sup>tay<sup>1</sup> na:<sup>2</sup>  
1 head painful<sup>1</sup>

「私は頭が痛いです。」

(41) <Ka lutang na sa ing.>

ka<sup>3</sup> lu<sup>1</sup>tay<sup>1</sup> na:<sup>2</sup> sa:<sup>3</sup> ij<sup>3</sup>  
1 head painful<sup>1</sup> deem<sup>1</sup> 1SG.REAL

「私は頭が痛いと感じます。」

[4-16] 【全体と部分・主体・恒常的】

彼女は髪が長い。

以下の例 (42) では, <amah> a<sup>1</sup>ma<sup>2</sup> 「彼女」で全体を話題 (topic) として取り上げた後, その一部分である <sam> sam<sup>1</sup> 「髪」の特徴について述べている。

- (42) <Amah a sam sau.>  
*a'ma<sup>23</sup> a<sup>3</sup> sam<sup>1</sup> sa:u<sup>1</sup>*  
 3SG 3 hair long<sup>1</sup>  
 「彼女は髪が長いです。」

[4-17a] 【全体と部分・対象・接触／結果状態が瞬間的】

彼は（別の）彼の肩をたたいた。

以下の例 (43) と例 (44) はどちらも同じ構造を持つ。それぞれの述部の本動詞に付いている接頭辞 <va> *va<sup>3</sup>-* は直示的中心 (deictic center) から離れていくことを示す去辞 (andative) であり, 別の彼の肩であることを明示している。

- (43) <Amah'n ama' liangko va sat.>  
*a'man<sup>3</sup> a'ma:<sup>2</sup> lian<sup>2</sup>kou<sup>1</sup> va<sup>3</sup>-sa:t<sup>1</sup>*  
 3SG.ERG 3SG.OBL shoulder DEIC-beat<sup>1</sup>  
 「彼は彼の肩を叩きました。」

[4-17b] 【全体と部分・対象・接触／結果状態が継続的】

彼は（別の）彼の腕をつかんだ。

- (44) <Amah'n ama' khut va len.>  
*a'man<sup>3</sup> a'ma:<sup>2</sup> xut<sup>3</sup> va<sup>3</sup>-le:n<sup>3</sup>*  
 3SG.ERG 3SG.OBL hand DEIC-hold<sup>1</sup>  
 「彼は彼の手を掴みました。」

[4-18a] 【知覚構文】

私は彼がやって来るのを見た。

以下の例 (45) と例 (46) はどちらも知覚構文で, 類似した構造を持つ。例 (45) では名詞節 <amah hong pai> *a'ma<sup>23</sup> hon<sup>1</sup>-pai<sup>3</sup>* 「彼がやって来るの」の後に主動詞として他動詞 <mu> *mu:<sup>3</sup>* 「見る, 見える」を置いている。例 (46) では名詞節 <tuni amah hong pai ding> *tu:<sup>3</sup>ni:<sup>2</sup> a'ma<sup>23</sup> hon<sup>1</sup>-pai<sup>3</sup> di:ŋ<sup>1</sup>* 「今日彼が来ること」の後に主動詞として他動詞 <thei> *t'ei<sup>3</sup>* 「知っている」を置いている。

- (45) <Ke'n amah hong pai pen mu ing.>  
*ken<sup>3</sup> a'ma<sup>23</sup> hon<sup>1</sup>-pai<sup>3</sup> pe:n<sup>2</sup> mu:<sup>3</sup> iŋ<sup>3</sup>*  
 1SG.ERG 3SG DEIC-go<sup>II</sup> TOP see<sup>1</sup> 1SG.REAL  
 「私は彼がやって来るのを見ました。」

[4-18b] 【知覚構文】

私は彼が今日来ることを知っている。

(46) <Ke'n tuni amah hong pai ding pen thei ing.>

*ken<sup>3</sup> tu:<sup>3</sup>ni:<sup>2</sup> a'ma<sup>2</sup> hon'-pai<sup>3</sup> di:ŋ<sup>1</sup> pe:n<sup>2</sup> t'ei<sup>3</sup> iŋ<sup>3</sup>*  
1SG.ERG today 3SG DEIC-go<sup>II</sup> PURP TOP know<sup>I</sup> 1SG.REAL  
「私は今日彼が来ることを知っています。」

[4-19] 【引用文中の再帰】

彼は自分（のほう）が勝つと思った。

例 (47) の述語動詞には他動詞 <lamen> *lam'en'* 「望む」に中動態標識 <ki> *ki<sup>3</sup>-* の付いた語が用いられている。また、2つの同じ人称代名詞を接続助詞 <leh> *le<sup>2</sup>* 「と」で繋げ、<amah le amah> *a'ma<sup>2</sup> le<sup>2</sup> a'ma<sup>2</sup>* 「彼と彼」とすることで「自分」という再帰的な意味を表す。

(47) <Amah'n amah leh amah zo ding a kilamen.>

*a'man<sup>3</sup> a'ma<sup>2</sup> le<sup>2</sup> a'ma<sup>2</sup> zou<sup>1</sup> di:ŋ<sup>1</sup> a:<sup>2</sup> ki<sup>3</sup>-lam'en'*  
3SG.ERG 3SG CNJ 3SG win<sup>I</sup> PURP CNJ MID-hope<sup>I</sup>  
「彼は自分が勝つと信じています。」

[4-20a] 【部分的に及ぶ動作と全体に及ぶ動作】

私は（コップの）水（の一部）を飲んだ。

部分的に及ぶ動作は <tawm> *to:m<sup>2</sup>* 「少し」（例 (48) 参照），全体的に及ぶ動作は <avek> *a<sup>3</sup>vek<sup>1</sup>* 「全部」（例 (49) 参照）等の副詞句を用いて表す。

(48) <Ke'n hai sung a tui tawm dawn ing.>

*ken<sup>3</sup> ha:i<sup>3</sup> suŋ<sup>2</sup> a:<sup>2</sup> tu:i<sup>1</sup> to:m<sup>2</sup> do:n<sup>2</sup> iŋ<sup>3</sup>*  
1SG.ERG cup inside CNJ water little<sup>I</sup> drink<sup>I</sup> 1SG.REAL  
「私はコップの中の水を少し飲みました。」

[4-20b] 【部分的に及ぶ動作と全体に及ぶ動作】

私は（コップの）水を全部飲んだ。

(49) <Ke'n hai sung a tui a vek a dawn ing.>

*ken<sup>3</sup> ha:i<sup>3</sup> suŋ<sup>2</sup> a:<sup>2</sup> tu:i<sup>1</sup> a<sup>3</sup>vek<sup>1</sup> a:<sup>2</sup> do:n<sup>2</sup> iŋ<sup>3</sup>*  
1SG.ERG cup inside CNJ water all CNJ drink<sup>I</sup> 1SG.REAL  
「私はコップの中の水を全部飲みました。」

以下の例 (50) では、動詞 <dawn> *do:n<sup>2</sup>* 「飲む」と動詞 <gai> *gai<sup>3</sup>* 「（飲食物を）取り入れる」から成る複合動詞を用いて飲む動作が全体に及んでいることを表している。

- (50) <Ke'n hai sung a tui dawn gai ing.>  
*ken<sup>3</sup> ha:i<sup>3</sup> suj<sup>2</sup> a:<sup>2</sup> tu:i<sup>1</sup> do:n<sup>2</sup>-gai<sup>3</sup> ij<sup>3</sup>*  
 1SG.ERG cup inside CNJ water drink<sup>1</sup>-consume<sup>1</sup> 1SG.REAL  
 「私はコップの中の水を飲み干しました。」

[4-21] 【恒常的な否定文】  
 彼は肉を食べない。

恒常的な否定文は一般的な否定文と形式上変わらない（例 (51) 参照）。酒を飲む習慣が無いことを表す場合も同様である（例 (52) 参照）。

- (51) <Amah'n sa ne lo.>  
*a'man<sup>3</sup> sa:<sup>1</sup> ne<sup>1</sup> lou<sup>3</sup>*  
 3SG.ERG meat eat<sup>1</sup> NEG<sup>1</sup>  
 「彼は肉を食べません。」

- (52) <Hua pa pen zu dawn lo.>  
*hua<sup>2</sup> pa:<sup>1</sup> pe:n<sup>2</sup> zu:<sup>2</sup> do:n<sup>2</sup> lou<sup>3</sup>*  
 DEM male TOP liquor drink<sup>1</sup> NEG<sup>1</sup>  
 「あの男性はお酒を飲みません。」

[4-22a] 【感覚述語・非人称文／感覚主体の存在が感じられない、より客観的な表現】  
 今日は寒い。

天気や空の状況に関する動詞は名詞 <khua> *xua<sup>2</sup>* 「空模様」を項に取る場合が多い。例 (53) の <khua vot> *xua<sup>2</sup> vot<sup>3</sup>* 「寒い」以外にも、<khua dam> *xua<sup>2</sup> dam<sup>2</sup>* 「寒い」、<khua lum> *xua<sup>2</sup> lum<sup>2</sup>* 「暖かい」、<khua mial> *xua<sup>2</sup> mial<sup>1</sup>* 「暗い」、<khua vak> *xua<sup>2</sup> va:k<sup>2</sup>* 「明るい」等の表現があり、「天候」という意味の複合名詞 <khuahun> *xo'hun<sup>1</sup>* にもこの名詞 <khua> *xua<sup>2</sup>* 「空模様」が含まれている。

- (53) <Tuni khua vot.>  
*tu:<sup>3</sup>ni:<sup>2</sup> xua<sup>2</sup> vot<sup>3</sup>*  
 today weather cold<sup>1</sup>  
 「今日は寒いです。」

[4-22b] 【感覚述語・非人称文／斜格主語】  
 私は（何だか）寒い（私には寒く感じる）。

例 (54) の助詞 <pong> *poj<sup>2</sup>* は「何だか～である、なんとなく～する」という意味を表し、動詞の表す事象に対してあまり関心や確信が無いことを表す。

(54) <Kei bel khua vot sa pong ing.>

kei<sup>1</sup> bel<sup>3</sup> xua<sup>2</sup> vot<sup>3</sup> sa<sup>3</sup> poj<sup>2</sup> ij<sup>3</sup>  
1SG CNTR weather cold<sup>I</sup> deem<sup>I</sup> somehow 1SG.REAL

「私には、何だか寒く感じました。」

[4-23] 【(感情主体が受動的である) 感情述語】

人がとても多かったことに私は驚いた。

感情表現は他動詞 <sa> sa:<sup>3</sup>「思う, 感じる」と共に用いられることが多い (例 (55) 参照)

(55) <Mi tampi a om pen lamdang sa ing.>

mi:<sup>1</sup> tam'pi:<sup>1</sup> a<sup>1</sup> om<sup>3</sup> pe:n<sup>2</sup> lam'daŋ<sup>1</sup> sa:<sup>3</sup> ij<sup>3</sup>  
human.being abundantly 3 exist<sup>II</sup> TOP astonish<sup>I</sup> deem<sup>I</sup> 1SG.REAL

「人がたくさんいることに私は驚きを覚えました。」

[4-24] 【現象文・現場での直接体験】

雨が降り始めた。

雨が降ることをティディム・チン語では名詞 <guah> gua<sup>23</sup>「雨」と動詞 <zu> zu:<sup>3</sup>「(雨が) 降る」(形式 II : <zuk> zuk<sup>3</sup>) で表す。助詞 <ta> ta:<sup>3</sup> の付加によって何らかの新しい事象が生起したことを表すことができる (例 (56) 参照)。また, 中動態標識 <ki> ki:<sup>3</sup>- を含む自動詞 <kipan> ki:<sup>3</sup>-pan<sup>3</sup>「始まる」とその主語にあたる名詞節 (文中の { } で括った部分) を用いて表すこともできる (例 (57) 参照)。

(56) <Guah zu ta.>

gua<sup>23</sup> zu<sup>3</sup> ta:<sup>3</sup>  
rain fall<sup>I</sup> NSIT

「雨が降りました。」

(57) <Guah zuk kipan ta.>

{ gua<sup>23</sup> zuk<sup>3</sup> } ki:<sup>3</sup>-pan<sup>3</sup> ta:<sup>3</sup>  
rain fall<sup>II</sup> MID-start<sup>I</sup> NSIT

「雨が降り始めました。(逐語訳: 雨が降るのが始まりました。)」

[4-25] 【中間構文】

この本はよく売れる。

「よく～する」という意味を表すには, <peuhmah> peuh<sup>23</sup>ma<sup>23</sup>「本当に」や <ziahziah> zia<sup>23</sup>zia<sup>23</sup>「大量に」等の助詞類を用いる。例 (58) と例 (59) はどちらも動作主非表示の文であり, それぞれの動詞には中動態標識 <ki> ki:<sup>3</sup>- が付加してある。

(58) <Hih laibu kikhawng peuhmah.>

hiʔ<sup>l</sup>      la:i<sup>3</sup>bu:<sup>l</sup>      ki<sup>3</sup>-xo:ŋ<sup>3</sup>      peu<sup>2</sup>ma<sup>2</sup><sup>3</sup>  
DEM      book      MID-sold.out<sup>l</sup>      really

「この本は本当に売れます。」

(59) <Hih laibu kilei ziahziah.>

hiʔ<sup>l</sup>      la:i<sup>3</sup>bu:<sup>l</sup>      ki<sup>3</sup>-lei<sup>l</sup>      zia<sup>2</sup>zia<sup>2</sup><sup>3</sup>  
DEM      book      MID-buy<sup>l</sup>      abundantly

「この本はたくさん買われました。」

### 3. おわりに

本稿ではヴォイスに関するティディム・チン語のデータを提示した。ティディム・チン語にはヴォイスに関連するものとして、動詞語幹の交替、中動態標識 <ki> ki<sup>3</sup>-, 使役接尾辞、他動詞化接尾辞がある。今回はティディム・チン語のヴォイスとその周辺について概観したが、今後はそれぞれの文法的な要素について更なる詳細な調査と研究が必要である。

#### 【付録】 本論文における音韻表記

本稿ではティディム・チン語の音韻の実態になるべく即した形で表記する為、正書法による表記のほか、Henderson (1965: 9-28) を参考にしながら筆者が考案した以下の音素表記を用いる。

ティディム・チン語の音節構造は (C1) V (C2) /T と表すことができる (丸括弧で囲んだ要素は非必須要素である)。頭子音 (C1) として現れうる子音音素には /p, t, k, b, d, g, p<sup>h</sup>, t<sup>h</sup>, s, x [x~k<sup>h</sup>], h, c [tɕ], v, z, l, m, n, ŋ<sup>ɸ</sup>, 末子音 (C2) として現れうる子音音素には /m, n, l, ŋ, p, t, k, ʔ, l<sup>ʔ</sup> [lʔ]/ がある。母音 V の位置に現れうる単独母音には /i, i:, e [e~ɛ], e: [ɛ:], a, a:, o [o~ɔ], o: [ɔ:], u, u:/ があり、長母音は形態統語的条件によつてしばしば短母音化する。短母音音素の /e/ と /o/ は音節の末尾または声門閉鎖の末子音 /ʔ/ の前に現れる場合、それぞれ [ɛ] と [ɔ] という音声で実現する。このほか、V には二重母音 /ia, ua, iu, i:u, ei, e:i [ɛ:i], eu, e:u [ɛ:u], ai, a:i, au, a:u, oi, o:i [ɔ:i], ou, ui, u:i/ や三重母音 /iai, uai, iau, uau/ が現れることもある。声調素には3種類ある。本稿では Henderson (1965: 19-20) の声調に関する記述を参考にし、各音節末に /<sup>1</sup>/ 「第1声調」、/<sup>2</sup>/ 「第2声調」、/<sup>3</sup>/ 「第3声調」という声調記号を付して表す (Henderson 1965: 19-20)。ティディム・チン語の声調は2種類の音節に分けて述べる必要がある。ここでは (a) 短母音で終わる開音節、(b) 韻が短母音と末子音 /-p, -t, -k/ から成る閉音節、(c) 末子音 /-ʔ/ を含む閉音節という3つのタイプの音節を「短い音節」と呼び、その他の音節を「長い音節」と仮に呼ぶ。単音節のレベルで見ると、原則として長い音節の第1声調は上昇 [1], 第2声調は平板 [H], 第3声調は下降 [N] の音調曲線で現れるが、短い音節の場合には第1声調は高音 [1], 第3声調は低音 [J] で実現する。語や句が連続する場合、連続変調が生じることもあり、1つの声調素が条件によって様々な音調曲線で実現する。例えば、第2声調の長い音節の後に第3声調が続く場合、その第3声調は長い音節の場合高音からの下降 [N], 短い音節の場合高音 [1] のピッチで現れる。また、上昇の音調曲線が連続して現れる場合は後部を高く平らな音調曲線 [1] で発音し、下降の音調曲線が連続して現れる場合は後部を低く平らな音調曲線 [J] で発音する傾向がある。この他にも、第2声調の長い音節が短音節化する場合は第1声調になる等、様々な声調交替やイントネーションが見られるが、詳細は Henderson (1965) の記述を参照されたい。

<sup>5</sup> 但し、借用語やオノマトペなどでは /ch [tɕ<sup>h</sup>], j [dʒ], f/ という子音が現れることもある。

本稿において斜体で示すティディム・チン語の発音表記は全て音素表記である。この付録での説明を除き、本文中では音素表記であることを示す // は省く。

#### 本稿で用いた略語の一覧

1: 1st person, 3: 3rd person, <sup>1</sup>: tone 1, <sup>2</sup>: tone 2, <sup>3</sup>: tone 3, -: morphological boundary, <sup>1</sup>: form I (verb stem), <sup>II</sup>: form II (verb stem), BUR: Burmese loanword, C: consonant, CAUS: causative, CNJ: conjunction, CNL: Cing Ngaih Lian (the co-author's name), CNTR: contrastive, COM: comitative, DEIC: deictic marker, DEM: demonstrative, ERG: ergative, (inv.): invariant form (verb stem alternation), LOC: locative, MID: middle voice, NEG: negative, NSIT: new situation (a term coined by Jenny & San San Hnin Tun (2016: xix, 377-379) in their study on Burmese), O: object, OBL: oblique, PL: plural, PSL: Pau Sian Lian (the main consultant's name), PURP: purposive, REAL: realis modality, S: subject, SG: singular, SUBS: substitutive, T: tone, TOP: topic, V: vowel / verb.

#### 謝辞

本調査に協力して頂いたパウシアンリアン (Pau Sian Lian) 氏と本稿の査読者に心より感謝の意を表す。なお、本研究は、JSPS 科研費 17K13442, 18H03599, 20H01256, 21K00480 の助成を受けている。

#### 参考文献

- Eberhard, David M., Gary F. Simons, and Charles D. Fennig (eds.) (2019) *Ethnologue: Languages of Asia*. Twenty-Second Edition. Dallas: SIL International.
- Henderson, Eugénie J. A. (1965) *Tiddim Chin: A Descriptive Analysis of Two Texts*. (London Oriental Series, 15.) London: Oxford University Press.
- Jenny, Mathias and San San Hnin Tun (2016) *Burmese: A Comprehensive Grammar*. New York: Routledge.
- Kemmer, Suzanne (1993) *The Middle Voice*. Amsterdam: John Benjamins.
- 西田龍雄 (1989) 「チン語支」 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編著) 『言語学大辞典 世界言語編 (中)』 2: 995-1008. 東京: 三省堂.
- Otsuka, Kosei (2022) Directional Prefixes in Tiddim Chin. In: Shintaro Arakawa; and Ikeda Takumi (eds.) *Grammatical phenomena of Sino-Tibetan languages 3: Function of Directional Prefixes*. 197-210. Kyoto: Kyoto University.
- Peterson, David A. (1998) The morphosyntax of transitivization in Lai (Haka Chin). *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 21 (1): 87-153.
- So-Hartmann, Helga (2009) *A descriptive grammar of Daai Chin*. (STEDT Monograph Series #7.) Berkeley: University of California.
- VanBik, Kenneth (2009) *Proto-Kuki-Chin: A Reconstructed Ancestor of the Kuki-Chin Languages*. (STEDT Monograph Series #8). Berkeley: University of California.
- 藪司郎 (2001) 「チン文字」 河野六郎・千野栄一・西田龍雄 (編著) 『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』 619-620. 東京: 三省堂.
- Zam Ngaih Cing (2017) A descriptive grammar of Tedim Chin. Ph.D. Dissertation, North-Eastern Hill University.

執筆者連絡先 : [otsuka@lang.osaka-u.ac.jp](mailto:otsuka@lang.osaka-u.ac.jp)

原稿受理 : 2022 年 12 月 31 日